



明治・大正

### 背景

明治25年(1892)に那賀川上流の現在の長安口ダム貯水池付近にある高磯山(那賀町)が崩壊しました。崩れた土砂は那賀川の河床から110mもの高さとなり、那賀川をせき止めました。その後、土砂にせき止められていた川の水位が上がり、とうとう水が一気に下流を襲いました。上流で土砂が那賀川をせき止めた様子や土砂崩壊の情報は、飛脚や半鐘などにより下流に伝えられていました。この話は、当時の那賀川最下流の阿南市での様子を描いたものです。

### アクセス 楠木神社

- 持井橋より南東へ約2km
- 阿南市中大野町
- 緯度経度 北緯33度56分07秒, 東経134度35分28秒



明治二五年(一八九二)八月一日、降り続く雨のため、那賀川の水かさはどんどん高くなっていきました。高いところにある屋敷の家でも、一軒一軒が孤立してしまいました。

ところが、午前八時頃、あれほど上から押し寄せていた那賀川の水が引いていきました。人々は、なぜ那賀川の水が引いていったのだろうと心配になりました。情報は飛脚によって伝えられました。水が引いたのは那賀川上流の高磯山が崩れて、那賀川をせき止めたため、せき止めたところより上流は湖になっている、木頭、坂州は水の底など、うそとほんとの情報が入り混じって大騒動になりました。

上流の土砂はいつまで那賀川をせき止めているのだろうか。大水が流れるようになったら、上の村から下の村に半鐘を打って知らせることになっていました。いつ半鐘が鳴るのだろうか。一日一日待っていました。

ついに、その日が来ました。八月四日午後二時、濁流が村々を飲み込む勢いで襲ってきました。あたり一面、泥の海になってしまいました。阿南市中大野の楠木神社には、大水から逃れるために三人がよじ登ったと言われる楠が今も残っています。

八月五日の午後七時になって洪水は引いていきましたが、後には泥をかぶった稲、野菜、牛馬のえさの雑草が残りました。その年、牛馬の餌にする稲わらは、水で洗って食べさせたとされています。